

錦織監督

映画の現場から



●●36

モントリオール世界映画祭から帰国してすぐに今年もしまね映画塾の撮影合宿に参加した。

20年以上続くしまね映画祭から生まれたこの塾も今年で10年目の節目。この塾の特徴はいわゆる都会で行われる一般的な映画塾と全く違う、ということ。都会では映画監督や脚本家、ベテランスタッフなどのプロによってシンポジウムや講演などの座学で行われるのが主流。しかも参加者はプロを目指す人や映画に精通している人がほとんど。東京や大阪の会場は多くのプロ志望者に席巻される。

一方、しまね式の映画塾は全く経験を問わないばかりか、老若男女に映画制作の楽しさを体験してもらおうと始まったもの。映画監督や映像作家を目指している人が多くないのが幸いして、職業や年齢をはじめ、経験、興味の度合いすらも多様で、初めての人も心配ない。カメラを一度も触ったことのない人がカメラマ

地域の底力 県外に示す

ンだったりするから、運動会で子どもをビデオ撮影した経験のあるお父さんよりも未経験の人でもしまね映画塾では立派な「撮影監督」「カメラマン」だ!

だから監督や脚本、録音や助監督、俳優、女優も経験がなくても大丈夫。誰でも「映画人」として映画を撮ることができるのだ。カメラ機材もテレビ局でプロが取材で使用している立派なものまで専門業者から全てレンタルしている。もちろん「オート機能」も付いている。

10年前、経験がない塾生の既成概念にとらわれない発想力に舌を巻いた。映画

学科に通う学生が撮影現場で壁にぶち当たり立ち往生するのに対し、農家のご婦人が臨機応変に経験と知恵で難関を突破していく姿に事務局一同うなづいたもの

だ。撮影は人間力が問われるということもあらためて私も教えられた。70歳代と10歳代が寝食を共にし、激論を飛ばし合う場も、映画塾を除けば、そう多くないと思う。

今年は大田市三瓶町が映画塾の舞台となった。三瓶自然館サヒメルを本部に過去最高の塾生が集った。地元のプロランティアの皆さんやエキストラ参加、ロケ地のご協力者など200人以上の参加者による

上の参加者による熱い、熱い映画塾になった。

東京や大阪、広島からの取材陣がこの10年間に報道で伝えてくれたのは一様に地域の「協力態勢」「一体感」に対するの驚きだった。「コミュニティ力」ともいえるかもしれないが、環境の素晴らしさにも驚き、塾生と一緒に回り、地区の人た

ちと触れあつての地域の姿に、島根のイメージが変わったと話していたのが印象的だった。島根だからできる映画塾だとも。

今年は黄金色に輝く田んぼの前で、「田植え祭り」のシーンが撮影された。春先にしか見られない風物詩、田植え祭り。見たことのない「秋に田植え!」の光景が見られるのも島根の底力の証かもしれない。そんな島根をあらためて誇りに思う。

(錦織良成・映画監督)
第2、4金曜掲載



2012年しまね映画塾のワンシーン「田植え囃子(ばやし)」